



「代表理事 岡玲子様 逝去のお知らせ」

岡玲子様が令和3年6月6日に逝去されました。

6月26日にサロン・マグノリアにて、親族様と岡玲子様関係の皆様と、ささやかな「お別れ会」を執り行いました。

岡玲子様は、財団の基礎を立ち上げ、最後に、“芹沢光治良ノート”、沼津記念館の展示、「孤絶」の出版を残し、そして我々に財団を託されました。

“作家・芹沢光治良が原稿用紙にコツコツ文字をうずめ、そして読者も読み続けている象徴の財団です。皆様とご一緒に作家芹沢光治良の遺志と文学作品を永く後世に読み継いでいくための財団です“

光治良先生・玲子様のご志を受け継ぐ皆さんと一緒に芹沢作品を読み繋げていく財団となるよう努力したいと思います。

芹沢文学の愛読者の皆様、どうぞお力をお貸しください。

“母への思い”

岡 寿里

母が亡くなり早くも一カ月以上経ちました。毎日電話で会話していたなか、もう母の声が聞けないことは本当に大きな穴です。母はいつも良く話しを聞いてくれ、また長年に基づく実用的なアドバイスをしてくれました。今となり、母はこの場合はどうするかなと想像して毎日を過ごしています。

寂しいなか、母には感謝の気持ちでいっぱいです。日本人でありながら、国際人として育てられ、人の出会いを大切にする事、相手の気持ちを考える事、そして意見が違って相手も尊重する事をおそわりました。それは母が芹沢光治良と金江から受け継いだものかと思われまます。又、音楽の美しさ、文学の力、歴史の重要さを母から覚えました。母は私をいつも応援し、好きにさせてくれました。そんな母のためにこれから何が出来るか考えています。

子供のころから芹沢光治良の文学を守りながら、多くの人、そして新世代の方にも親しまれるように一生懸命頑張っている母の姿を見てきました。夜はいつも遅く、何をしているのかと聞くと講演会の準備、朗読会に向けて本の読み直し、新しい企画へ向けてのリサーチ、ほとんどは芹沢光治良文学活動に関係していました。そんな母を思い出し、皆さまの力を借りて芹沢文学が読み継がれるよう出来る限り働きかけたいと思います。母のためにはこれしか出来ません。これからも財団を応援してください。



岡玲子様のご尽力に感謝し、ご冥福をお祈りいたします。 芹沢光治良の四女、岡玲子さんが六月六日に東中野のご自宅で、心不全で亡くられました。その哀しい知らせを受け取った時、あまりにも突然なことで、心に大きな虚ろを抱かされた感じでした、玲子さんは一九三八年七月十三日のお生まれだから、あと一月すれば満八十三歳におなりになるところで、長寿社会の現代に於いて早過ぎるように思います。長引く新型コロナ渦の不自由な中で、つい一月ほど前にオンラインでお目に掛かり、お元気そうだったことが思い出されてなりませんでした。

ところで、玲子さんに得た交際は、もう四半世紀を数えられます。その間のことを振り返りますと、玲子さんは父である芹沢光治良の生前からの意思を、誠実に生きようと努められていたように見えます。没後十年の時のエッセイ「父の思いで」に、「玲子と寿里(私の娘)で家をまもってほしい」「記念館のようにして、読者に訪ねてもらえるように」と伝えられたとあります。この父の意思を遺志として実現することを、玲子さんは信条にしたに違いありません。玲子さんは末娘であることから、光治良から「娘達の中で一緒に生きてられる時間が一番短いから」と可愛がられたことをよく話しましたが、その愛情に応えようとするものだったのです。そして、光治良が書斎に籠もって、原稿用紙に体を沈めるように読者と向き合う背中を見詰めてきたからです。

また、玲子さんをそのようにさせたのには、次のような事情もあったと思います。玲子さんは高等学校を卒業すると、安川加壽子の元で学んだピアノの勉強に、一九五七年に姉の文子さんを追ってフランスへ留学します。九年に及ぶ厳しい勉強の後にピアニストとして帰国しますが、一九七〇年に外交官の岡照さんと結婚すると、その任地に従って世界各地を転々とするようになります。そうしたことから親元を長く離れましたが、一九八九年に夫の辞職と共に、光治良と姉の文子さんの暮らす東中野の懐かしい家に戻ります。それまで十分なことの出来なかった孝行に努め、一九九三年の光治良の逝去後には、芹沢文学の“守り人”になったのです。二〇一五年に文子さんが亡くなるまでは、それこそ二人三脚で、それ以後はお一人でその重責を果たされてきました。

玲子さんはどちらかと言えば小柄でしたが、ピアノに向かうと大きく見えました。それは芸術家としての矜持が、その引き締まった表情に現われたのでしょうか。けれども、普段の玲子さんはとても控えめで、細かな気遣いをされる人でした。それこそ芹沢家で育てられた生来のものであり、また外交官の夫との海外生活で身に付けた社交術だったのでしょうか。向き合う相手を立て、その良さを引き出しながら、ご自分の考えと上手に調和させていくのに長(た)けていたように思います。そんなお人柄の玲子さんだからこそ、父の光治良に託された遺志を、一つずつ誠を込めて実現できたのでしょうか。

光治良の生誕百年、没後十年、生誕百十年、没後二十年など、東京や軽井沢、そして沼津での節目節目の集まりへのご出席とご協力は言うまでもありません。スルガ銀行の支援で運営されていた沼津の芹沢文学館が、市営の芹沢光治良記念館として再出発すると、その運営に惜しみない助力をしました。企画展示への貴重な資料提供や、講演会への講演者の紹介です。林芙美子や川端康成の未発表の書簡が展示され、三浦朱門や加賀乙彦の講演会等が実現しました。ご両親との思い出深い家を取り壊し、一九九八年に新築したご自宅三階の“サロン・マグノリア”で主催した集まりも多彩なものでした。講演会、朗読会、そして玲子さんのピアノ演奏会で、五十名を定員にしたホールは、いつも参会者に溢れていました。

玲子さんは芹沢文学が永く読み継がれるために、努力を惜しまれませんでした。その最初は勉強出版からの『巴里に死す』の復刊でしたが、引き続き同社からの完全版『人間の運命』全十六巻別巻二を実現しました。光治良が晩年に気に掛け、手を入れ続けていた手沢本に日の目を見させたのです。これだけでなく、やはり同社からの『芹沢光治良戦中戦後日記』、ポプラ社からの少女小説『緑の校庭』、小学館のP

+D BOOKSからの『サムライの末裔』と『孤絶』の出版は、どれも玲子さんのお人柄が出版社を動かしたものでした。また、これらに関連して、玲子さんが恵比寿の日仏会館ホールを会場に選んだ三回の企画もありました。それぞれにゲストを招いた集まりは、広いホールを一杯にして、今も読み継がれる芹沢文学が語られました。

ここまで書いてきたことは、玲子さんの取り組まれたことのほんの一部に過ぎません。書き切れないくさんのことを、亡き光治良の心と対話を重ねて、その思いを読者に繋ごうとされたのです。二〇二〇年には多方面にわたる取り組みをまとめるために、一般財団法人芹沢光治良文化財団を設立し、その代表理事に就任されました。そして、二〇二二年に開館予定の中野区立中野東図書館内に開設される、芹沢光治良の特別展示コーナーのための協力を始めていました。そこでの配布も考えて、芹沢文学を身近に知って貰うための『芹沢光治良ノート(1)』を、先頭に立って編集されていたのです。玲子さんのお別れの会の日に配られたのが、その小冊子です。そこに「(1)」とあるように、玲子さんは長くシリーズにすることを考えていました。

芹沢文学が読み継がれるために、玲子さんは誰も真似の出来ない先導者の役を果たしてくれました。これからは玲子さんが考え、成し遂げられなかったことを、皆で力を合わせて一つずつ実現して行きたいと思います。それが玲子さんから託されたことであり、頂戴した御交誼に報いることであると考えています。

“玲子さまを偲ぶ”

友人：野乃宮紀子

今日は七夕である。アツという間に玲子さまが去って逝かれて、ひと月と一日。まだ、心の整理はついていないのだが、玲子さまを偲ぶには何かしらふさわしい日のように思われる。

玲子さまはものやわらかで実に粘り強い方でいらした。これはお父上・芹沢光治良先生の資質を受け継いだものでもあろう。

今となっては記憶も定かではないのだが、最初にお目にかかったのは、1997年の晩秋か初冬における芹沢邸サロン・マグノリアの会であったようである。

何故、見ず知らずの私どもにサロン・マグノリアのご案内の葉書が届くのか、最初はいぶかしんだが、至文堂から1997年9月号の「国文学 解釈と鑑賞」で芹沢光治良特集が出ていたので、玲子さまが出版社に編集者の連絡先を問い合わせたようである。

その頃から、玲子さまは、さりげなくソツと近づいてきて、耳元で囁くのである「どうですか。紀子さま、マグノリアで何かお話をさせて」と。

当時の私には(今でも、あまり変わらないのだけれど)人前で話すなど、とんでもないこと。大勢の人の前に立つこと、注目を浴びること、目立つことは、恐怖以外の何物でもなかった。晒し者にされ、公開処刑されるような恐怖感であった。

玲子さまに、そういう訳を話して、お断りしていた。それでも玲子さまは決してあきらめず、毎回のよう、にこやかにやわらかに耳元で囁くのである。

6年あまり断り続けたが、やがて、私の心は申し訳なさでいっぱいになり、『人間の運命』や神シリーズなど、心の糧となる至宝とも言うべき作品を残してくださった光治良先生にも、せめても文章以外で少しは恩返しをしなければという気持ちが生じてきた。柔よく剛を制す、の典型であろう、玲子さまの柔和さに頑なな私の心が撓められ、結果として、玲子さまの粘り強さに私が根負けした形となった。

恥をかく覚悟で、生まれて初めて人前で話したのが、2003年7月12日のサロン・マグノリアにおける『人間の運命』の魅力であった。

私どもが東京を離れて今年で9年になる。その間、玲子さまとは毎年お電話で、あれこれと親しくお話を

交わっていた。クリスマスには、いつもサンタクロース光治良先生(実は玲子さま)からプレゼントが届いた。この2年ほどは、コロナ禍のせいで青森市以外は県外に出していないが、毎年必ず上京し、機会があればマグノリアを訪れた。

2005年10月1日に、芹沢邸の二階にある客室で、光治良先生の「疎開日誌」のノート(原本)を見せていただいたことがある。非常に興味深い日記だったので、主人・渡部芳紀が勉成出版の社長・池嶋洋次氏に紹介した。勉成出版でも興味を示し、玲子さまと話し合い「疎開日誌」だけでなく、完全版『人間の運命』の復刊、『芹沢光治良戦中戦後日記』の出版につながった。

なお、玲子さまは、主人が中央大学で行っていた公開講座「人間の運命」も受講されていて、2008年から2012年の夏まで5年間ほど八王子の大学に通っていた。

玲子さまに最後にお会いしたのは、4年前の2017年1月13日である。この日は、宮中で歌会始があり、主人は陪聴者として参列していた。その間、私は新宿・京王デパートの6階(メガネのイワキ)で玲子さまと待ち合せをした。その年の春、ポプラ社から復刊される予定の『緑の校庭』の本文をデジタル化したメモ리를渡し、打合せをするためである。場所を7階の喫茶室に移し、積もる話に花を咲かせた。

お元気そうでいらしたのに。これからもお会いする機会があると疑いすらしなかったのに。でも、すでに為すべきことはなさっておいででしたのね。

玲子さま、どうぞ、今は安心して、お父上・お母上・姉上さまたちと共にお幸せに。

貴重な素敵な思い出を沢山くださってありがとうございました。感謝とともに。合掌。



■ マグノリア会員の皆様へ

● 今秋に「岡玲子 偲ぶ会」と「財団3周年記念会」を計画しています。

● 岡玲子様のお思い出やメッセージをお送りください。

・ホームページの「文学サロン」[「https://serizawa-kojiro.com/bungakusalon/」](https://serizawa-kojiro.com/bungakusalon/)にお書き入れください。

又は、財団メール「serizawa52@nifty.com」にメールください。(ホームページにアップいたします)

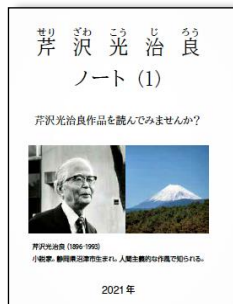
●「芹沢光治良ノート(1)」発行

岡玲子様が”芹沢光治良ノート”作成する際に思いを話してくださいました。

- ・初心者の方に芹沢文学(人間の運命・神シリーズ)を読んでいただくための”芹沢光治良ノート”にしていきたい。
- ・作品“人間の運命”をただ紹介するものではなく、“人間の運命”を読んでもみたくなる”芹沢光治良ノート”にしなければいけない。
- ・「人間の運命」の1巻から順番に紹介するのではなく、テーマを持って紹介したい。
- ・1回目のテーマとして「森次郎の生まれた沼津(我入道)」をテーマとしたい。
そのため2巻「親と子」の紹介から始めたい。

このようなお考えで、昨年8月から一年近くかけて、4名の皆様と楽しく完成させることができました。
(来年、“芹沢光治良ノート(2)”発行予定です)

会員の皆様へ、まだ芹沢文学に出会っていない人達にどうか出会いをお与えください。



●「孤絶」が小学館【P+D BOOKS】より発行されました。

- ・自伝的三部作(孤絶・離愁・故国)の「孤絶」です。
フランスで当時日本では死病と恐れられた結核にかかった男が、身近に迫った死を本能で感じるにより、研究していた経済学に興味を無くし、生への熱情を文学で表現したいと考えるに至る。
病は嫌がおうにも精神の変革を求める。それが死を覚悟させるほどの大病であればあるほど。
病とは何か、死とは、生とは――。

定価 715 円 (税込) 判型/頁 B 6 判/230 頁 ISBN9784093524148

次回発行は、来年の4月頃を予定しています。

発行： 一般財団法人 芹沢光治良記念文化財団
〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-3
事務局 池田 三省 メール：serizawa52@nifty.com
財団ホームページ URL：<http://serizawa-kojiro.com>